

幼稚園教育実習生の保育実態からとらえた保育実践力

—幼稚園教育実習の現状と課題—

学校法人 白梅 理事長
橋本 希義

I. はじめに

本実践報告では幼稚園教育実習で責任実習を行った学生の実習経過と後反省会から保育の実践力として以下の項目について実践報告とした。保育の実践力とは、さまざまな包義があるが、少なくとも保育技術のみを向上させることが実践力とはならないことはいうまでもない。保育について学んだ知識や考え方をもとに、自分がどのようなスタンスで保育者として子どもにどう向かうのかを意識したうえで、自分の保育技術をもって子どもの遊びを援助することができる力であると考えている。保育者自身の保育観を確立し、子どもの遊びにアプローチしていくことが重要だと捉えることができる。ただやみくもに保育を計画し遊びを援助していくのではなく、保育者の意図や願いを明確に持ち保育活動を考え設定していく事が重要であると考えている。具体的な「保育実践力」として、1) 指導案の作成能力、2) 作成した指導案を実践する技術力、3) 次の活動に活かす課題を見出す力であると考えている。その保育実習期間に学生は、自分の保育技術や保育観を多角的に意識して振り返ることで、次の課題を見つけ、設定する。実習先で、保育者の保育やアドバイスと、自分や他者の保育とを重ね考察し、自分の疑問や課題をクリアしようとすることで、自分の保育観や保育のねらいを達成するための保育内容のあり方や教材研究について考え直し、それまで学んできたことの意味を自分なりにまとめ、自分自身の保育課題を再設定しながら「保育実践力」を身に付けるための基礎を形成しようとしている。保育実習の中で(1) 指導計画を作成する力(2) 保育を展開する力について具体的にどのようなことを学んでいるのかを考える。

II. 幼稚園教育実習の目的

幼稚園とは学校教育法第1条に定められた、最初の学校教育機関である。平成18年12月の教育基本法改正により、「幼児期の教育」(第11条)の目標として、「生涯の人格形成の基礎を培う」ために、「健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない」とある。このように幼児教育の性格と重要性が明文化されたことは、今後幼児教育が学校教育の中で果たす役割や課題の大きさを示したものである。更に平成19年に学校教育法が一部改正され、子どもが今後経験する学校段階に合わせて構成されたことから、ここでも幼稚園教育が今後の学校教育の基礎として大き

な役割を担っていることがわかる。

幼稚園の設置は、国、地方公共団体、学校法人、社会福祉法人などに認められているが、「幼稚園設置基準」に従って認可される必要がある。保育内容は「幼稚園教育要領」に国の教育課程の基準が示されている。教育時間は一日4時間標準、年間教育週数は39週を下らないこととなっているが、幼稚園では標準以上の教育時間を設定している。また現在は「預かり保育」を実施する幼稚園も増えたことから、子ども達の在園時間は長時間化の傾向がある。保育年数は5歳児1年間のみの1年保育から3歳児から3年間の3年保育まで多様であるが、一般的には3歳児からの3年保育が主流を占めている。

このように幼児教育の重要性の認識が深まるなかで、幼稚園教諭の資質向上も求められている（「幼稚園教員の資質向上について一自ら学ぶ幼稚園教員のために一」平成14年幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書）。更に幼稚園は、地域の幼児教育センターとして位置付けられているため、地域や家庭に対する子育て支援といった役割も担っている。幼児期という重要な時期に関わる幼稚園教諭は子どもや保護者にとってはただ一人の担任の先生として重要な時期の子どもにかかわっていかねばならない。保育実習は、一人一人の子どもの成長を支えるための最低限の力や学生の人間性など、学習した事を、どの程度具現化しているかを確認する大切な経験の場となる。

Ⅲ. 幼稚園教育実習の意義

1. 求められる保育実践力

「教育職員免許法施行規則」第6条では、幼稚園教諭免許を取得するために必要な単位の規定が示されている。

教員免許取得のための実習には、いくつかの意義をあげることが出来る。その中でも重要なことは、保育実践力の習得である。養成校で学んだ知識や技術は、実際の保育現場で子どもとかかわり生活する中で、初めて実践的学習へと深化していくといえる。また子どもとかかわりながら、必要な経験が得られるような環境構成や援助を行う保育者の姿から、専門職としての保育者役割を実感し、その責務を改めて知ることにもなる。保育者は、PDCAサイクル（Plan・Do・Check・Action）に基づき、絶えず縦断的改善が求められるものである。更に実習では、一人ひとり異なる育ちの様相を学生自身が目の当たりにするなかで、それまでの子ども観や保育観を再構築する機会ともなる。

実習では、幼稚園での保育の実際について体験的学習をする中で、幼児理解や保育者役割、職務内容、保育の流れ（実態把握・計画・実践・反省の循環）、そして幼稚園の在り方について理解することが目的である。

幼稚園教育要領解説では教師の役割として①幼児の主体的な活動と教師の役割②集団生活と教師の役割を挙げている。「幼児の主体的な活動が確保されるよう、一人一人の理解に基づき保育を展開していくことと、一人一人を尊重しながら集団の中で個人の良さが生かされるようにすること」が大切だと述べている。「集団には、同じものへ興味や関心、あるいは同じ場所にいたことからかわりが生まれる集団や同じ目的をもって活動するために集まる集団もあれば、学級のようにあらかじめ教師が組織した集団もあり、それぞれの集団の中で幼児は多様な経験をする。幼児の発達特性を踏まえ、それぞれの集団の中で、幼

児が主体的に活動し多様な体験ができるように援助していくことが必要である。」と書かれている。これらのことから、「保育実践力」として、幼稚園や保育所といった集団生活の中で子ども一人一人の理解と予想を元に計画を立て、環境を構成する。そして保育実践の中で子どもが主体的に活動できるように、一人一人に応じて様々な役割を果たすことができる力といえる。保育について学んだ知識や考え方をもとに自分がどのようなスタンスで保育者として子どもに向かうのかを意識したうえで、自分の保育技術をもって子どもの遊びを援助することができる力であると考えられる。保育者自身の保育観を確立し、子どもの遊びにアプローチしていくことが重要だと捉えることができる。ただやみくもに保育を計画し遊びを援助していくことではなく、保育者の意図や願いを明確に持ち保育活動を考える事である。

2. 実習生の実践から

学生の中に「保育実践力」が机上での想像的な理解ではなく実感を伴って体得できるほどの理解となるためには実習での経験が何よりも重要である。そこで、実践例として子ども集団に対する一斉活動の指導である責任実習（設定保育等）のみを取り上げて、学生が保育現場で保育者の指導を受けながら学び取った「保育実践力」とはどのような内容なのか実習を通して「保育実践力」について学ぶことができているのか「保育実践力」として定義した具体的な内容について述べる。

過去5年間に教育実習に参加した学生の設定保育の内容は、ストローや紙コップなどを使っておもちゃを作る活動や画用紙でとんぼ作りやさつまいも作りなど、季節感のある題材を取り入れたものを作る活動など、「制作遊び」を行った学生が多数を占めた。

次にフルーツバスケットや追いかけ鬼などルールのあるゲームをする活動である「ゲーム遊び」を行った学生、次にリトミックやダンス、ダンゴムシになって遊ぶなど、表現を楽しむ遊びである「表現遊び」を行った学生、次にエプロンシアターを行った学生などがいた。保育の現場での状況や子ども達の様子を参考に園の担任と相談して指示で行っていた。学生は参考図書を見ながら自分で考えて設定保育の内容を決定していた。

1) 活動設定の理由

活動内容を設定した理由では、「子どもたちが体を動かすことを楽しんでいたので」「制作を好んで行い遊ぶ道具を作って楽しむ姿があるから」など「実際の子どもの姿（興味関心）」から活動を設定していた学生が多く見られた。次に「近々芋ほりがあるので」「秋の果物を考えた」など「行事や季節から」考えて活動設定をしていた。

また、「教材で楽しく遊んでほしい」「友達関係を深めてほしい」「運動会の練習で疲れているので気分転換させてあげたい」など子どもの実態を観察し、そこから「実習生の願い」をもち活動を設定している。「絵本を保育室にあるものから選ぶ」「決められた歌の伴奏をする」など「指導者からの指示」で活動を設定していた。

反省点については、反省点と感想を記述しているが、反省点の中に特に「保育実践力」に関する点を取り上げて示す。

まず一つ目は「援助」に関する内容が一番多かった。「興味をもって活動を続けられるような言葉かけ」や「個々に応じた言葉かけ」など「適切な言葉かけ」について「泣いている子へのかけり」「子どもの状態に合わせたかかわり」「活動に飽きてしまった子へのかけり」

わり」など「適切なかかわり」についての実践現場に初めてかかわった学生らしい反省点であった。「頭が真っ白になり一人一人見られなかった」など「全体の把握」ということに関しての記述があった。「個人差が大きく活動の切り替えのタイミングが難しかった」や「活動が早い子、遅い子の差が大きく配慮がうまくできなかった」など「個人差の配慮」について「進めるのに必死でまとめがうまくできなかった」など「活動のまとめ」に関してであった。

二つ目は「導入時の工夫・説明」に関する内容について「作り方をわかりやすく説明するのが難しかった」「ゲーム遊びのルールを説明しても理解していない子がいた」「子どもに分かりやすい言葉での説明」など「作り方やルールの説明」についてであった。次に「導入時、本物のさつまいもを用意していたがうまく活かせなかった」や「作成するもののイメージを持たせる工夫ができなかった」など「導入時の工夫」についてであった。「集中させて説明を聞かせられなかった」という経験不足からくるものであった。

三つ目は「教材研究」に関する事である。「ハサミが上手く使えなかった」「輪ゴムが巻きつけられなかった」や「3歳児には難しかった」など「子どもの実態に応じた活動内容」について幼児の成長発達を見据えていない設定であった。

「ゲームの内容を全員が最後まで楽しめるものにすべきだった」「ふのりを使うべきだった」や「パスではなくマーカーを使うべきだったなど」「教材や素材の研究」についての知識不足が多かった。

四つ目は「事前準備」に関する内容として「ルールがわかりやすくなる道具の使用」「制作がスムーズに進むように保育者がしておくべき下準備」など「実践して気づいた準備・準備物」について不足点や「新聞紙を敷いておくのを忘れていた」「のりをふくお手拭きを準備できなかった」など「考えていた準備物忘れ」について「ピアノの練習不足」「絵本の下読みをしていなかった」など「保育技術の練習」についてなど余裕のなさがうかがわれた。

五つ目は「時間配分」に関する内容で「時間が超過してしまった」と全体を把握する配慮不足があった。

2) 指導者からのアドバイス

反省においては、園長・主任・担当教諭からのアドバイスについて項目を整理すると。一つ目は「援助」に関するアドバイス「分かりやすく大きな声で」「一人一人への言葉かけ」や「活動を認めるような声掛け」など「適切な言葉かけ」について、次に「泣いている子へのかかわり」や「子どもの様子に応じたかかわり」など「適切なかかわり」についてである。「全体を見る」という「全体の把握」について「早くできた子への対応」「ルールを理解できていない子への働きかけ」など「個人差の配慮」についてである。

「子どもの自由な発想を活かす」「子どもの発見を広げる」など「子どもの発想」に関する事や「手遊びは大きい動作で」「子どもを見回るときは子どもが何を楽しんでいるのか見る」など「指導技術」に関する点や「説明は全員が聞ける状態になってから」「落ち着かせる工夫」など「集中して聞かせる」ことについてなどが指摘事項であった。

二つ目は「導入時の工夫・説明」に関するアドバイスであった。

三つ目は「教材研究」に関するアドバイスで「色を自分で選ばせる」「この年齢ではセロハンテープの台数を少なめにする」など「子どもの実態に応じた活動内容」に関する点で

あった。

四つ目は「事前準備」に関するアドバイスで「材料は事前に道具箱にそろえておく」「ペンは事前に用意しておく」など「活動がより充実するための準備、準備物」に関する事であった。

五つ目に「時間配分」に関するアドバイスであった。「事前に計画の時間配分を考えておくべき」という指摘があった。

IV. 保育実践力を育てるための課題

園では子ども集団に対する一斉活動の中の「保育実践力」について学生が、教育実習で重要とされる責任実習（設定保育等）の中で、この「保育実践力」を身に付ける実習を行っている。この実習でさらに、1.指導計画を作成する力、2.保育を展開する力、の2つの力における学生の学びについて考える。

1. 指導計画を作成する力

指導計画を作成する力については、学生は子どもの様子を観察し、子どもの興味関心を読み取り活動内容を設定していた。子どもの興味関心を読み取る力はまだまだ足りないと思われるが、保育を計画する際に子どもの実態に応じて発達を支えることができるような活動内容を設定しなければならないとの必要性を感じ実習を通して実感しているようであった。このように指導計画を作成する初めの段階で子どもの興味関心と保育者の願いやねらいを重ね合わせて考えた活動やその季節や行事に合った活動を取り入れることの重要性を学ぶことができたと考えられる。

反省点で「導入時の工夫・説明」で「子どもを引き付けるような導入の工夫」の重要性も感じている。活動内容が決まれば、導入の段階で子どもの意欲を引き出すための工夫を考える必要がある。この導入がいかに重要であるかについて実感を伴って学ぶ学生が多い。それと共に導入の段階で活動内容を理解させるため、分かりやすい説明は不可欠である。子どもが理解しやすい言葉とはどのような言葉なのか、言葉だけでなく物を使って説明するなど発達段階に応じた説明の仕方考えることが重要である。

子どもの活動（展開）を考える際には「事前準備」にある「詳細な計画とシミュレーション」がある。これは子どもの姿を詳細に予想しながら展開を考え、うまくできる子やできない子などいろいろな子どもへの援助や配慮についてしっかり考えておくことが重要である。こうして計画ができた段階でその計画を頭の中にしっかりいれ、事前に模擬保育やシミュレーションを行い、一通りの流れつかんでおくことが重要である。そのことで落ち着いて設定保育を行うことができる。このことは「保育実践力」を身につけるためのよい方法であるということを学んでいた。

2. 保育を展開する力

保育を展開する力について、学生は「適切な言葉かけ」や「適切なかかわり」について学んでいる様子が伺えた。一人一人の子どもに合ったふさわしい言葉かけや丁寧な言葉遣いなど子どもに語りかけるたくさんの語彙をもち、場面に応じた声掛けができるよ

うにすることがとても重要だと感じていた。

子どもに伝わる言葉や話し方を意識せずに実習に参加した学生は本当に苦心し、分かりやすく伝えることの難しさや自分自身の語彙力の低さを実感していたようである。普段から正しい言葉を遣い、一つの事柄について言葉を変えて表現する力も必要であると学んでいる学生もいた。

また、子どもの様子をよく観察し手助けが必要なのか見守るべきなのか、子どもが本当に必要としているかかわりと保育者の願いを重ね合わせたふさわしいかかわりを場面に応じて見極めかかわっていくことが重要であると気づいていた。

子どもに話すときの声や動作の大きさ、子どもを観察する視点など「指導技術」についても学んでいた。学生は必死になって保育実践をしているので、自分がどんな声や動きをしているのか分からない。また「子どもたちが少々ざわついていても注意を引き付けることなく、話し始めていることがあり、集中させなければという意識も持てないくらい自分が話すことに必死になってしまっているのだと予想できる。これらのことは実践後の反省会で指導者からアドバイスをもらって気づくことができ、今後意識して取り組んでいくという課題を持つことができたようだ。